



FFGビジネス
コンサルティングの
釣り道 ちよつと
つりみち
[平家の里の大山女魚編]
Vol.13

①ヤマメを狙う道具(ミノープラグ) ②釣られたことをわかっていないようなヤマメ ③ヤマメは沢水にさらしてリリース ※溪流釣り場はほとんど入漁権が設定されています

「深山幽谷……」

九州の脊梁のほぼ中心、祖母傾山系から国見岳にかかる山深い奥地にひっそりと佇む椎葉の郷は、まさにその言葉がふさわしい。

ここを訪れた方ならわかるだろう。そこは、そそり立つ針葉樹林に覆われた急峻な山あいを、碧い清水を湛えた谷が深く切り裂き、訪ねる者を拒むかの様な険しすぎる地形は、追討の手から逃れていた平家の落ち人からすると、ようやくたどり着けた安寧……。それを約束された地に見えたのかも知れない。

夏の日差しが降り注ぐ前の、梅雨の名残の霧雨が杉林にまとわりついている。それは鬱蒼と茂った森林の表面に潤いをもたらし、フィトンチッドを含んだ杉の香ばしい芳香が辺り一面を包み、木々の間は蕭蕭と幽玄な雰囲気醸し出す。

筆者は沢に下り立ち、ソーダのような青い水色を湛える小さな淵の脇に立っていた。そこから恐る恐る入水し、上流の方を目指し沢登りをしながらこの溪で育った大ヤマメを狙っていくのだ。ウエーダー(ゴム長)を履いているとはいえ、標高



深い山あいの溪谷

600Mを超える高地の沢の水は冷たい。また川の流れは水色と裏腹に重く両足は常に強い力で圧迫されている。足を踏み出すと、残された足の周りの川底の小石が流れに飲まれ崩れ去り、なんとも心もとない。しかし溪流釣りつてヤツはこつやつて自然のままの沢を攻め登り、流れに潜む溪魚を攻略していくのだ。

先の小雨でほどよく増水した沢の相を読みながら、左奥の大岩の陰に、子魚を模したミノープラグ(疑似餌)を泳がす。刹那、岩の横の水下面がキラッと輝き右手に衝撃と躍動感が伝わる。それは急な流れを全身に受け、俊敏に水中を逃げ回る。ただ決して水面に飛び出すことはなく、途中から身をよじり回転させ最後の抵抗を見せる。そのファイトからそれが良型のヤマメであることがわかる。

そのヤマメは、尺を超えるメス。本来は美しい斑紋を纏っているが、これは大型になりおそらく下流に下りる準備をしていたのだろう、その全身は銀色の眩い光を放つ。

ヤマメを沢水にさらし、リリースする準備をしてたら水滴が頬を濡らした気がした。見上げると、木々の間を雨粒が落ちてきている。間もなくこの岸辺は濁流が覆うかも知れないが、この溪と一尾はなんとも言えない爽快な気持ちを与えてくれた。

平家の人々が落ち延びたとされる深い山あいの溪谷には、まだまだ魅惑の美しい山女魚たちがひっそりとしつかりと生きていた。また会いに来よう、と筆者は想ふ。

「すみません、家から往復500km近くあるんですけど……遠っ！(泣)」



ギンギン銀化した大ヤマメ